

『はじめに』

新型コロナウイルスが世の中に大きな影響を与えてから3年が経過し、未だ先行きの見えないうちを進まなければいけないという状況が続いています。また、これまでの当たり前が通用せず、コミュニケーションの形も大きく変容を遂げており、世の中はさらに進化していくことが予想されます。今後も先を見据えながらその時々にあった方針を立て、柔軟に方向転換しながら、社会によりよい変化をもたらすような事業を構築していくことが私たちの使命であると考えます。

『JCとの出会い』

2014年、名古屋市から戻ってきた私は家業に入りすぐに青年会議所の門をたたきました。高校を卒業してから宮崎を出ていた私にとって、知人と呼べる人は少なく、同世代の知り合いを増やしたいと思ったのが入会のきっかけです。入会当初は首都圏で働いていたこともあり、少しばかり鼻っ柱が強く、同期の誰にも自分は負けていないと根拠のない自信をもちながら入会面接を受けたことを覚えています。入会してからは多くの先輩方の人間性の素晴らしさや考え方に驚き、また私が困ったときや悩んだ時にはアドバイスをいただいたことで道しるべを示していただき、私の自信はすぐに打ち崩されことは言うまでもありません。特に2018年の全国大会宮崎大会に関わり、JCI日本への出向と式典担当を経験したことで全国の方々との接点を持ち、いろんな視点を学ぶことができたこと、式典会場がオーシャンドーム跡地からメディキットに2日前に変更となり、1年間準備してきたものを2日間で修正して完遂した時の達成感は今でも忘れられません。このように私も青年会議所の単年度制の恩恵を受け、発展と成長の機会をいただき、いまこうして理事長所信を書いています。

この8年間の経験で私は3つのことが必要であると考えます。

1つ目は連綿と受け継がれてきた創始の精神を次世代に引き継ぎ、世の中に合わせて進化しながら、社会に求められる事業を行う団体となること。

2つ目は自ら課題を設定しそれに取り組むことのできる人材の育成と、青年会議所で受け継がれてきた恩送りの系譜を次の世代に伝えること。

3つ目はわれわれがハブとなることで他団体を巻き込み、新たなカウンターパートをつくり事業構築していくこと。

この3点を大切に1年間活動していく所存です。

『人は柱なり』

JCI Mission に定義されているように、私たちは地域の若者にとって、発展と成長の機会を提供するプラットフォームでなくてはなりません。また同時に、入会したメンバーが地域をリードすることのできる人財へと成長するプラットフォームでないといけないとも考えています。

私の入会した 2014 年、当時は 200 名を超えていた会員数も緩やかに減少しており現在も少しずつ減少しています。他の青年会議所と比較すると宮崎青年会議所の会員拡大は決して失敗していないと言えますが、事実として会員数の減少は起こっており、それは退会者にあると考えています。この退会者が年間を通じて発生し、加えて各年度の卒業生の人数と合わさっていくため、それを越える会員の拡大が求められるといった形になります。まずは入会の際に青年会議所がどういう団体でどのような活動をしているのかといった理念共感型拡大を積極的に推進し、入会前になぜ他団体ではなく青年会議所じゃなければいけないのか、その部分を説明した上での入会促進を行いたいと思います。今は「JC しかない時代」ではなく、「JC もある時代」です。私たちは社会によりよい変化を起こし、運動をつくっていかねばなりません。地域に眠る多くの課題の解決に向けて、ともに運動を行う同志を増やしていきたいと考えます。

現在、在籍しているメンバーのうち、3 年未満のメンバーが約 6 割と在籍年数の少ないメンバーが増えています。また、昨今のコロナの影響によりオンラインでの事業が増えたことから、すべてのメンバーに発展と成長の機会の提供がなされているかという点も難しい状況です。前述のとおり、退会する原因の多くは共感を得ていない、活動に積極的でないことから始まります。まず、入会 3 年未満のメンバーには多くの発展と成長の機会を提供し、多様化する価値観をしっかりと自分自身で受け止め、判断できるよう昨今の状況を踏まえた事業構築を行っていきます。また、アクティブでないメンバーに対しても改めてこの団体が人財育成の場になることを理解してもらいたいと思います。アカデミーのメンバーがアクティブになることで他のメンバーへも波及し、出席率の向上のみならず、事業参画への意識が改善し、改めてこの団体に所属するメリットを感じてもらえるような育成計画を構築します。

『未来への投資』

明るく豊かな宮崎の実現を目指し、私たちはこの地域に住み暮らす子どもたちが安心して生活できる環境を構築し、それを推進する団体でなければなりません。文部科学省が提唱する「GIGA スクール構想」のもと、2021 年に宮崎市内のすべての市立小中学校に高速大容量のネットワーク環境が整備され、すべての児童生徒にタブレット端末が配布されています。これは Society5.0 に向けた人材育成を目的としていますが、AI や IOT が急速に発展する現代社会において、従来のオフライン教育のみの教育からそれにプラスしたオンライン教育も活用した STEAM 分野のスペシャリストを育成することは必要であると考えます。この AI 時代の到来と慢性的な IT 人材不足の日本社会の中で、どこかのタイミングで企業側が受け入れる人材の多くが STEAM 人材とそうでない社員との考え方に相違がでることが想像できます。産・官・学におけるカウンターパートと連携し、宮崎に住み暮らす子どもたちがしっかりとこの時代の流れに

取り残されない計画を立案し、実行していきます。

また国立青少年教育振興機構の調べによると、幼少期から中学生期までの自然体験が多い高校生ほど思いやり、やる気、人間関係能力等の資質・能力が高いという結果を得ていることから、この宮崎の自然豊かな環境であるからこそ育める自然の学びをJCの山などを活用しながら実施していきます。

海外への渡航が困難な状況となる中、2年が経過し、国際社会とのやり取りが難しくなった今もなお、私たちは立ち止まることなく国際関係を維持していかなければなりません。また、国内の生産年齢人口の減少により外国人労働者の人口は増えており、移住外国人は依然、増加傾向にあります。2012年から続く国際フェスティバルも年々形を変えながら進化していますが、2022年に開催したワールドテラスでは県内に住み暮らす在留外国人の方々の自助共助を目的とし、ファンクションの中にその要素を含めました。気軽に国際交流ができない昨今において、県内に住み暮らす外国人移住者の方々が宮崎を好きになり愛してくれるよう運動を展開しておりますが、本年も互いに双方の文化を認め合い、コミュニケーションを増やしていくことが街の発展に繋がると考えます。また、近年リモートでのやり取りが続いているJCIポート、JCIマリーナとの交流も状況を鑑みながら交流を深め、姉妹JCとしての永続的な関係構築を図っていきます。

『想像を超える』

私たちは現代社会のすさまじいスピードの変化と Society5.0 の流れの中で多様な価値観に触れ、固定観念に縛られることなく新しい技術や考え方を自分のものにしていかねければなりません。昨今、サイバー空間とフィジカル空間の双方での社会が現実化しており、予測のできない時代へと突入していきます。これまでの当たり前に縛られることなく新しい価値観に触れ、時代に取り残されないようにしなければなりません。イノベーションがますます進化する中でDXやメタバースの知見をメンバーが取り入れられるような事業構築を行い、視座を高く持ちながら運動を行ってまいります。

また一方、これだけイノベーションが進化する中で開発された商品を購入するのも使用するのも結局は人間であるため、『人の役に立ちたい』や『人の生活を豊かにしたい』など、人の目線での商品開発ができなければ、世の中に必要とされません。その目線を備えるためにゴールデンサークル理論を用い、なぜ必要なのか、なぜそれを行うのかといった視点を養い、多様な価値観にふれることでこれまでの型にはまっていた自分を振り返り、新しい感覚を学ぶ機会を創出します。

ダイバーシティインクルージョンが広がり、私たちは多様化する社会の中で多くの問題を抱えています。厚生労働省の発表によると、2018年の子どもの相対的貧困率が13.5%だったことが分かりました。全国と比較しても宮崎県は下位の方に位置しておりますが、7人に1人が相対的貧困であると言われております。2021年から相対的貧困に対する認知事業を行っておりますが、昨年は認知を目的としたことでSNSを活用し、また他団体と連携しながら事業を推進し、様々な検証結果がみえてきました。表面上では見え

にくい相対的貧困に対しても、現状に目をそむけることなく地域の課題として認識し、運動になるよう他団体と引き続き連携しながら地域コミュニティの枠でこの課題に向けて取り組む事業を構築していきます。また、全国的に広がりつつあるベビーファースト運動も全国で36都道府県まで広がりを見せており、宮崎県もその中に含まれております。当LOMも子育て世代のメンバーがいるので、子供たちのためにできることを大人として、親として、企業人として探し、運動に繋がります。

『発信力を高める』

今年で22年目を迎えるまつりえれこっちゃんみやぎきは地域の方々に広く親しまれ、ダンスをメインとしたまつりとして県内で広く認知されています。コロナの影響により開催できなかった2年間を経て、2022年に久しぶりの開催をすることができました。

年度によって様々な特色を出しながら県内でも有数のまつりとなった、まつりえれこっちゃんみやぎぎですが、高校生を中心としたダンスだけでなく、新たなコンテンツをつくり県外にも認知されていくようなまつりに昇華していかなければなりません。当然、宮崎に住み暮らす方々のためのまつりでなければいけません、そのコンテンツや発信方法は広く多くの方の目に留まる形で進化していく必要があります。開催できなかった2年間と2022年の開催を経て、毎年組織を組むことも苦勞していることから、前年卒業した先輩方に協力いただくようなスキームを作り、Withコロナ、Afterコロナを見据えた新しい形のまつりへと進化させていきます。

私たちは年間を通じて多くの事業を開催し、その事業単位で広報活動を行ってまいりました。毎年開催している事業の認知度は幾分か高くなっていますが、単年度の事業においては興味のある方にしか届いておらず、一般市民へはまだ浸透していないのが現状です。事業単体での広報活動ではなく年間の広報計画をたて、SNSを活用しタイムリーに発信していくことが必要であると考えます。また団体としてのブランディング計画をたて、時代に即した広報活動を展開することで、なんとなく団体の存在を知っているだろう入会対象の方々に興味喚起し、会員拡大にも繋げて、新たな会員発掘を行っていきます。そして運動を巻き起こす団体として、ただの報告だけにならないようその経過状況や運動を引き継いでくれる団体や個人の目に留まるような発信を行っていきます。

『新しい組織体制 強靱な組織は個人の成長から』

コロナ禍を経て、私たちはこれまで当たり前に行われていた「会議」の在り方と向き合う機会をもらいました。この状況が結果的にデジタル化を推進したわけですが、同時に会員同士の関係性が希薄になり、これまで学んできた諸会議設営の事前準備など、あらゆる面でそのひずみを感じています。組織としては動く際に必要なことは、個々人がその諸会議にあたりどれだけ事前準備を意識できているかだと考えており、そしてそれを同じ価値観で組織として共有し認識できているかだと考えます。従って、理事会や総会はこれまでのような厳格な空気感は維持しつつ、

状況に応じた臨機応変な対策を立てながら、時代に即した新しい会議運営を行ってまいります。

組織の継続的な発展のためには透明性の高い財政審査とコンプライアンスはもちろんのこと、時代の変化に応じた諸規定のルールやマニュアルの改訂など柔軟な検討が必要であると考えます。ですが、JCI日本の基準も年々変わり、進化しています。メンバーがJCI日本の基準と同等のコンプライアンス基準を理解できるよう LOM 内に浸透させていきます。

2021年に事務局検討委員会を立ち上がり、メンバーからでた様々な意見を集約し、これまで理事のみしか持ってなかった鍵をメンバー全員がカードキーとして所有することになりました。これにより会員の不平等をなくし、会員がいつでも役職に関わらず事務局を利用できるようになりました。また毎月の委員会の開催や会場の予約も SLACK を活用したルールへと変更し、デジタル化を推進しております。今後も事務局のシームレスな連携とプラットフォームを作成することでメンバーが活用しやすい事務局運営を行います。

『全国大会宮崎大会の5年検証』

2018年に開催した全国大会宮崎大会の開催はJCI日本の出向者の方々、宮崎JCシニアクラブの先輩方や九州地区内の副主管の皆さまと大会構築を行い、その夢を実現することができました。開催中の荒天により幾多の変更がありましたが、それもまた私たちを大きく成長させ、その後の事業構築にも大きく影響してきました。主管獲得から全国大会開催、そして今日に至るまでの成果を振り返り、関わられた方々への感謝の意を伝えるとともに今後の青年会議所の発展へと繋がります。

『結びに』

私の好きな詩にロバートフロストの選ばなかった道という詩があります。

一方は踏みならされた道

もう一方は誰も踏みならしてない未開の道

私は後者をえらんだ

それが大きな変化をもたらした

人生は選択の連続である。日々、目の前にある選択と向き合い結論を出すわけですが、それは全て自分の未来に繋がっています。安定を求めることなく多様化する価値観を受け入れ、現状に甘えることなく変化し続けていこうではありませんか。

全ては明るく豊かな社会の実現のために

住み暮らすこどもたちのために

まだ見ぬ誰かのために